

## 特別寄稿：「フレディ・ハバード追悼文」by ハービー・ハンコック

(注：フレディ・ハバードは、2008年12月29日、享年70歳で惜しくも亡くなった。下記は、ハービー・ハンコックが書いてくれた追悼文である)

私は、フレディ・ハバードが私の世代の最も偉大なプロ・ジャズトランペット奏者であると信じています。彼の影響は、今日でも多くの若いトランペット奏者のサウンドから感じられます。彼の温かい音色と並外れたテクニックは、未来永劫に驚嘆されると考えられます。

個人的には、私の初めてのリーダー作『テイキン・オフ』(注：1962年5月録音)で、フレディがプレイしてくれたので、とても幸運でした。

フレディは、ちょうど私が求めていた人でした。

そして、彼のアルバムへの貢献は画期的でした。

私の4作目のアルバム『エンピリアン・アイズ』(注：1964年6月録音)の収録曲「ワン・フィンガー・スナップ」で、最初のフレディの即興演奏ソロの滑らかさは、それだけである種の「メロディ」になっていました。ほとんどのミュージシャンが予め作曲されたものと信じていますが、実は完全な即興です。

フレディと私は、幾つかのアルバムで共演しました。

V.S.O.P. クインテットでは、フレディは創立メンバーであり、彼の芸術性がプロジェクトの推進を助けてくれました。一回限りのツアーとして始まったV.S.O.P.でしたが、私にとって忘れられない音楽の感動的瞬間が10年も続きました。

フレディの遺産は間違いなく、ジャズというアメリカが最も貢献した音楽芸術の発展に、大きな役割を果たしました。

ハービー・ハンコック

(翻訳：高木信哉、翻訳協力：小林繁徳)

Freddie Hubbard was, I believe, the greatest jazz trumpet stylists of my generation. His influence is still being felt in the sound of many young trumpeters today.

His warm tone and formidable technique will be considered marvels well into the future.

Personally, I was so fortunate in that Freddie played on my very first album as a leader "Takin' Off".

He was exactly the person I wanted and his contribution was groundbreaking. On a tune called "One Finger Snap" on a subsequent album of mine, his beginning improvised solo line worked so seamlessly that it became a kind of generic "melody" that most musicians still believe was the composed melody, when in fact it was not.

He and I crossed paths musically in several albums. In the group VSOP he was a founding member who's artistry helped propel that project, which began as a one time tour, to a decade of memorable musical inspirational moments for me.

His legacy is secure in that he played a seminal role of the shaping of the evolution of America's foremost contribution to the musical arts, jazz.

Herbie Hancock

## 【Eye of the Hurricane / 楽曲解説】

by 田中裕士(Pianist)

### ■録音データ

V.S.O.P. / Herbie Hancock (SONY / SRCS 7121~2)

1976年6月29日 Recorded: New York's City Center  
Herbie Hancock(pf), Ron Carter(b), Tony Williams(ds) Freddie Hubbard(tp,flh),  
Wayne Shorter(ts)

Herbie Hancock - 36歳の時、米国におけるライブ録音アルバムからのテイクである。「ニューポートの追想」なる邦題で2枚組CDアルバムとしてSony Recordsより発売されている。内容としては1976年のNew Port Jazz Festivalで組まれた「ハービー・ハンコックの追想」というプログラムから、約19分に及ぶすさまじい炎の演奏記録である。リーダーであるHerbieのメンバー紹介アナウンスに始まり、Tony Williamsのエンジン全開のドラムソロ→Ron Carterのベースウォーク→Freddie Hubbard→Wayne Shorterのブローへと順次紹介されてゆくドラマティックなプレゼンテーションに聴衆が歓喜し、そのまま凄まじい演奏へとな

れこんでゆくさまは圧巻である。どの瞬間も緊張感が緩むことないスリリングな演奏の展開はまるでジェットコースターに乗っているかのような快楽を味わうことが出来る生々しいライブトラックである。蛇足を加えると、Herbieの使用楽器が(珍しくも)YAMAHA製“Electric Grand Piano CP-80”である。現在は製造中止となったピアノであるが、新しい物好きのHerbieにとっては、この楽器に(当時は)魅せられ、公演に使用したのであろう。数多い彼のCD作品の中でもこの楽器をマスターキーボードとして使用したという例は大変珍しく、稀少な記録だとも言える。

### ■楽曲構造、主題とその和声考察

#### 《Basic Chord Changes for F-minor Blues》

【Intro】F - Blues (Not F-minor Blues) →(※注1)

|      |      |     |     |  |
|------|------|-----|-----|--|
| Fm7  | Fm7  | Fm7 | Fm7 |  |
| B♭m7 | B♭m7 | Fm7 | Fm7 |  |
| D♭7  | C7   | Fm7 |     |  |

Blues 形式 (12小節×2 Chorus=計24小節)

原曲は、アルバム“Maiden Voyage”(Blue Note 盤/1965年)に収録されている、ハービー作曲によるFのマイナーブルースであるが、V.S.O.P. Quintet 結成当時より(オリジナル録音当初とは違い)Fm Blues フォーマットからよりアウトし、自由奔放な表現手法で演奏されるようになった楽曲である。この曲のレコーディング音源を私は数多く知っているが、Intro部や展開に毎回いささかの変化があることも興味深

い。今回のアルバムでは、(※注1)あえてイントロ部分がkey of Fの(マイナーブルースではなく)ノーマルブルースで演奏されており、主題提示部になって初めてマイナーブルースに変貌する意外性の効果は面白い。近年ではトラディショナルな(上記コード進行に代表される)古典的マイナーブルースのハーモニー推移はほとんど原形をとどめていないといえる。具体的考察は次項を参照されたい。

### ■ハービー・ハンコックのインプロヴィゼーション(ソロ)考察

マイナーブルースという和声フォーマットの場合、5小節目にIVm7(この曲の場合、B♭m7)に進み、9小節目にVI♭7(D♭7)、10小節目にV7(C7)と進むのが通常であるが、その3ヶ所のモーションが敢えて不確実に演奏されている。Freddie Hubbard(tp)~Wayne Shorter(ts)のインプロヴィゼーションでは上記マイナーブルースの(古典的)和声フォーマットは維持されているが(Ron Carterのベースライン構築をフォーカスすると明白だ)、次なるWayne Shorterのソプラ

ノサクセス~Herbieのピアノインプロヴィゼーションにおいては、いわゆる和声学的に言う「強進行部(完全四度上行解決進行)」をほとんど排することにより、より調性感を浮遊させ、確定的な主要3和音(I-IV-V)の事実上のFunction(機能)を極力あいまいにしている。結果、Fm7のワンコードでインプロヴィゼーションが展開されているか(?)のように聞こえてくる。さらにその旋律構築を深く考察してみると、トータルセンター(Fm)を軸にしなが

比した和声遠近感を自由自在に操りながら、壮なるドラマの如く音楽を構築完遂させている。代理和音・経過和音・借用和音・複合和音・仮想和音・ポリリズム概念・・・などな

### ■コンピング(バックイング)における、オーケストレーション考察

両手を使用した、典型的なオープンハーモニーでオーケストレーションを構築している。また、左手右手のパーカッシブなポリリズムを駆使しながら、Tony Williams との二人三脚により、通常のハーモニックリズム(ハーモニーの重力に導かれるリズムが描く音楽的ダイナミクスレンジ)の常識を遙かに覆す(それ以上の)、マグマのようなリズムの激情が見事に表現されている。そして、そのエナジーに駆り出されるように、個々のソリストの創造力を Herbie 自身が先導して触発している。こういうチームインタープレイがこれほどまでにも生々しく行われていたジャズグループを(黄金の Miles Davis Quintet 以後)、私は他に知らない。Herbie はフロント奏者(ソロイスト)に対する“単なる伴奏”という古典的責務ではなく、リズム的にもハーモニー的にも、いかなる

ど、その多種多様なイディオム、思考、構想はあまりにも広大遠達であり、後生のジャズイディオム・表現手法の発展に多大なる影響を与えた。

瞬間も美しく、いかなる瞬間もソロイストを誘発～刺激し続け、音楽自体が向かっていこうとする方向やベクトルを示唆するという使命を充十分に果たしている。

現代の Herbie Hancock の持つ総合的音楽スキルは、私の考察によると大きく5項目に分類されると考える。(1)美意識 (2)表現手法 (3)演奏技術 (4)音楽語彙 (5)構想～アイデア ...こういった各5項目の熟成度・完成度が、今や比類がないレベルにまで達しているピアニスト/ジャズミュージシャンであることは明確な事実であるが、既に1976年(Herbie 本人が36歳)にして、彼の持つ音楽的スキルがほぼ完成の域に達していたことが確認できる、驚愕の作品CD—トラックであることに、改めて深い感動歎息、そして同意賛嘆を覚えた。

## 【 “Doin’ It” 楽曲分析～解説】

by 田中裕士(Pianist)

収録アルバム Herbie Hancock: *Secrets Recorded: 1976*

### ■Musicians

**Herbie Hancock** : Acoustic Piano, Yamaha Electric Grand Piano, Fender-Rhodes Electric Piano, Arp Odyssey, Arp String Ensemble Synthesizers, Hohner D6 Clavinet, Moog Micro-Moog, Oberheim Polyphonic Synthesizer, Echoplex  
**James Gadson** : Drums **Paul Jackson**: Bass **Wah Wah Watson** :Bass&Vocal **Bennie Maupin** : Soprano and Tenor Sax, Saxello, Bass Clarinet, Lyricon **Ray Parker Jr** : Guitars&Back Ground Vocals **Kenneth Nash** : Percussion

### ■アルバム特色

音楽的コンセプトとしては全作(Man-Child)の延長線上にあり、よりポップに熟成されたブラックファンクサ

### ■Doin’ It この曲の魅力と影響力

こういった楽曲で、「これはジャズなの？」と問われると、「はい!」と答えることに些かの躊躇は隠せない(?)が、逆に「うん、そうだよ!」と言ってしまう場合もあるということが、ジャズ音楽の持つパレットの広さだとも思うし、ハンコックブランドのステイタスなんだ一とも思う。“Jazz”の定義は、多種多様な価値観・美意識のもとに幾通りにもジャッジされて然るべきで、聴き手が Jazzy に感じたら、理屈なしにしてそれはその人にとっての Jazz でいいんじゃないかなあと私は思う。しかしこの楽曲でキーボードを演奏する奏者が、仮にも Herbie Hancock ではない別人だったとしたら・・・「実に

ウンドに仕上がった、ハンコック36歳=1976年録音の隠れた名作だと私は価値付けている。

気持ちいいグルーヴを持った Boogie-Funk でかなり Jazzy だね～」と私なら言ってしまうのだが(苦笑)、、、音楽を縦割りりで区分して、ウンチク理屈を論じるのは、好きじゃないので、このへんにしよう。。。

さて、近年21世紀に入ってからは House Music, Funk Music のファン層にも大人気のこの曲(アルバム)だが、録音から既に32年も経過している現在ですら、良質の Dance Music として、そのファン層から5つ星評価を獲得維持!している事実、さすがマエストロ・ハービー・ハンコックだな～と感服してしまう。これは特筆に値するホントに素晴らしい

ことだと私は思う。

### ■楽曲構造

A - B - C - A - D (8-8-8-8) = 40 小節の主題を持ったシンプルな構造である。

Ray Parker Jr. のギターカッティングリズム(達人!)で気持ち良いイントロダクションが始まり、James Gadson のドラムス、Paul Jackson(?)のベースという最強ファンク・スクラムが完璧なリズムグルーヴ感を創り出し、ハンコックの奏でる Rhodes Electric Piano が絡み、いよいよ主題提示が

|     |       |           |       |           |  |
|-----|-------|-----------|-------|-----------|--|
| [A] | E7    |           |       |           |  |
|     | E7    |           |       |           |  |
| [B] | E7    |           |       |           |  |
|     | E7    |           |       |           |  |
| [C] | E7    |           |       |           |  |
|     | E7    |           |       |           |  |
| [D] | Cmaj7 | Bm7   Em7 | Cmaj7 | Bm7   Em7 |  |
|     | Cmaj7 | Bm7   A7  | A7    |           |  |

### ■インプロヴィゼーション

こういったグルーヴを重要視したファンクトラックでは、ハンコック自身もインプロヴィゼーションパートをハイライトとは考えていないようである。それよりももっと、Dance Music としての心地良さ～みたいなリズム的なエクスタシーに主眼を置いているように聴こえてくる。ポコーダーを使った軽いインプロヴィゼーション部分、バックイングを発展させたハンコックお得意の Rhodes Electric Piano のテイスターなインプロヴィゼーション、エンディングにおける、コーラスバックグラウンドを背景にしたシンセサイザーのブロー・インプ

始まる。Funk Music では、ベース解放弦を響かせ易いという理由から、Key of E は好んで用いられる調性である。この場合の Tonal Center は、E-major でも E-Minor でもない(Blues 同様の)“中間(中性)調”であることは言うまでもない。大まかな主題部分ハーモニーチェンジは下記のとおりである。

ロヴィゼーションがフューチャーされているが、ハーモニーは全編に渡り、E7 の1コードのみで、ハーモニーセンスとしても軸からアウトしてゆかない範囲内の展開に終始している。コアなジャズファンにはいささか物足らなく感じるかもしれない(苦笑)が・・・前述どうり音楽の楽しみ方も多種多様ありなので、ここは「頭をスイッチして(難しい理屈は忘れて)みんな踊ろうよ!」とハンコックもメッセージしている(?)ようにも聞こえるのは、私だけだろうか、。。。

### ■70年代中期～ハンコックが及ぼした影響力

1960年代、Miles Davis の門下生として徹底的にジャズのイディオムと、(将来のジャズ界の第一線を躍進し続ける為の)スキル、アイデアを身につけたハンコックは、“HeadHunters”を皮切りに1970年代中期～1980年代初期にかけてエレクトリック楽器を堂々と導入し、ジャズのみならず大きな括りでの Black Music 全般にスポットを当て、自身の音楽をよりグローバルに前進発展させていった。その確信観と成果は、世界中の多くのミュージシャン、聴衆達に多大な影響をもたらした。その功績、意義はあまりにも大きく偉大である。こういったハンコックのピアニストとして

の、またサウンドクリエイターとしての冒険心とその実証は、1980年代中期～1990年代初期にかけての Fusion Music ブームに大きな因をもたらすことにもなっていたことは明確な事実であり、価値深き歴史である。

しかしながら、あまりにも先進的過ぎたハンコックの音楽的思考～作品は、なかなかコアなジャズファン達には当時理解されず、(彼の創造・功績に対する)正当なる評価を得る為には、後の“Future Shock”(1983年作品)まで待たなければならぬことになるのである。